



# ケルン・コンサート、 パート2c

■大学生の頃、音楽好きの知人から一本のカセットテープを借りた。複数のジャズの曲が入ったもので、曲名などは書かれていない。四人相部屋の学生寮でヘッドフォンを付けて聞いてみると、ある一曲に耳がくぎ付けになった。それはピアノのソロによるもので、胸が締めつけられるような美しいメロディーが、ほとぼしる水流のように続く、六分ほどの曲だった



演奏が終わると同時に、大きな拍手と歓声があったので、ライブの録音だろうか。それは、やがてアンコールを促す拍手へと変わっていき、ややあって、フェイドアウト。知人に曲名を尋ねたが、彼も適当に編集したので、音源は分からないという。

■二年ほどして、偶然に目にした雑誌の記事が思わぬ契機となる。記事いわく、「キース・ジャレットの『ケルン・コンサート』はソロ・ピアノの1つの到達点であり、特に『パート2c』の美しさには誰もが心を奪われるだろう。」「私は文面を読むと、すぐに市の図書館へ行き、CDライブラリーから『ケルン・コンサート』を探し、借り出した。まるで、『未知との遭遇』の主人公が何かの啓示を受けてデヴィルズ・タワーを目指したかのように。寮へ戻り、胸の高鳴りを感じながら、『パート2c』を選曲する。そし

て、流れ出した硬質な鍵盤の音は、何度もラジカセの巻き戻しボタンを押して聴いたあの旋律だった…。

■ジャズ・ピアニスト、キース・ジャレットによる1974年の「ケルン・コンサート」。解説を読んで驚いたのは、このソロ・コンサートで演奏された全四曲が、即興演奏、つまり、その場で、彼がつくりだした音楽だったということだ。だから、長さも、数十分の大曲から数分のものでさまざま、曲名はなく、演奏順にナンバーが振られているだけだ。そして、私が瞬時に心を奪われた『パート2c』の冒頭のメロディーですら、後年になって、録音から書きおこされた楽譜を見ると、ドシラソという単純な下降音に過ぎない(それなのに、なぜあんなに美しく響くのだろうーyou tube など実際に聴いていただければおわかりいただけると思う)。

■天からの啓示のようなこの演奏であるが、実は、以下のようなエピソードがあったという。

■キースは、前日の夜にソロ・コンサートをスイスのローザンヌで終え、朝早くにドイツのケルンへの車で移動する(渋滞なしでも六時間あまり)。相当の疲労を残したまま、会場に入ったキースは「ピアノ以外はすべて準備万端整っていた」ことを知る。自伝によれば「ずいぶん前から調律されておらず、ハーピシコードのきわめてまずいコピーか、ピアノの中に留め金でも入っているみたいな音がした」と。別のピアノをスタンプにリクエストしたが、すでに時間的に不可能だった。

しかも、この日のコンサートは前から録音が決



まっていたという事で、彼が絶望的な気分になったことは想像に難くない。満身に寝ていない状態で、満足のいく調律がなされていないピアノ。彼は「眠りかけたまま」ステージに臨むことを余儀なくされる。プロなら二の足を踏んでもおかしくない状況だ。もちろん「演奏しない」選択もあり得ただろう。しかし、彼は「演奏することを選択した。」「つまりこういうことだ。ぼくはもう、ピアノの前に行って演奏するんだ。他の事なんか、もうどうにでもなれ!」そう決意して臨んだ演奏は、静かに幕を開けた…。

■窮地におちいったときこそチャンスだという考え方があつた。追い詰められたねずみは天敵の猫にさえかみつくというし、寄せ集めの兵士でも、川を背に、決死の覚悟で戦えば、力の上回る相手とも互角に渡り合う。公立高校の前期試験で合格できなくとも、後期試験まであきらめずに頑張りぬいて希望をかなえた生徒たちを私は大勢知っている。ただし、立ち向かうのも、撤退するのも自分の決断であり、決して誰かのせいではない。

■『：中三、高三は確実に試されていますね。大きな余震がない日は、是非、必死に頑張ってください。」「震災があつたから、仕方ない」となるのは嫌ですね。」「震災があつたのに、何であるに凄いな…?」と言われる存在になつてくください!私思うのはこの一点のみです!』

■熊本市の或る進学塾の塾長による文章である。前震、本震と、数えきれない余震によって、被災地の学習塾は、生徒の無事を確認した後も、しばらく授業ができない事態が続いた。私も、東日本大震災の記憶が思い起こされた。塾スタ

ッフの心労は大変なものだろう。しかし、その中でも先のメッセージのように生徒を鼓舞し続ける姿に、この仕事にたずさわる者としての矜持をかいまみる。

■また、東日本大震災のときに、熊本の繁華街のアーケードには、地元高校生の手による応援の垂れ幕が飾られていた。その中の一枚の文言が大変印象的だった。「こんなときだからこそ、私たちにできることは勉強!」そう、募金もボランティアもできなかったとしても、君が、目の前の困難を少しづつ乗り越え、成長することが、この世の中を豊かにすることにつながる。

■だから、繰り返そう。困難に立ち向かうのも、撤退するのも自分の決断だ。決して誰かのせいではない。(関)

## 国語における

### 文章読解について

新学年になり、早二ヶ月近くたちました。中学校によつては、もう中間テストが終わるところもあります。勉強、頑張っていますか?

さて、今回は国語における文章読解力を向上させるためにどうすれば良いのか、という話をします。ただし、国語が得意な人は今までの勉強のやり方を無理やり変える必要はありません。あくまで苦手としている生徒を対象に話を進めていきます。

### 【一】文章内容を理解するために、文章中に作業をしましょう

「作業をする」とはどのようなことかわかりますか。これは、「文章中に印をつけたり、線

を引いたりすること」です。このような作業をしたことはありませんか。また、このような作業をしている人を見たことはありませんか。



なぜ、このようなことをすると思いますか。

それは、大事な部分だから、後から読むときに見やすくするため、わかりやすくするためでしょう。

文章内容を理解するためにまず行うことは、文章を読みながら作業することです。線が引かれた部分をつないでいけば、大まかな内容をとらえることができ、文章内容が理解しやすくなります。

ここで問題となってくるのは、どこに印を付けた線を引きやすければよいのか、ということとです。中学一年〜三年には一学期の国語の授業を通して、「文章読解テキスト《前編》」を配布しています。そこに記載されているので、ぜひ参考にしてください。

### 【二】問題を解いた後の取り組み方で大きな差が生まれます

以前、生徒のノートチェックをしているとき、非常にショックな出来事がありました。

その生徒のノートは丁寧に使われていて、一見、とくに問題なさそうに見えました。



模範解答は余白部分に丁寧に赤ペンで書かれていました。そのとき気軽に私は生徒にこんな質問してみました。「この書き抜き問題を間違えたんだね。模範解答はこれだけだ、これは文章中のどこにあった？」すると、生徒は「わかりません。」と即答してき

ました。その後よく話してみると、今まで、問題を解いて答え合わせしたら、それで終わりだったそうです。模範解答をノートに書くが、それがどこに書いてあったのか確かめることもなかったそうです。

どの教科でもそうですが、ワークなどに取り組むのは現在の自分自身の力をはかるためです。そして、そこから自分自身をレベルアップさせるためには、間違えた後、なぜ間違えたのか、なぜ模範解答はこうなっているのかということをとことんまで追求する必要があります。問題を解いて、答え合わせをするだけで満足しないでください。成績を伸ばす生徒は答え合わせをした後の過ごし方を重視しています。

### 【三】解き直しをしましょう

最後は当然「解き直し」です。解き直しを指示されても「所々答えを覚えているから」「内容を覚えていいるから」といった理由でやらない生徒がたくさんいます。これはとても残念なことです。東大合格者は、模試も過去問も三回解き直すと言います。解き直しにはそれぐらいの価値があるのです。解き直しは「ある程度内容や答えを覚えている状態で、解き方・考え方を思い出しながらまねる作業」のことで、学力向上のために非常に重要な作業です。これから出会う全ての問題で実行してください。本気で伸びたいと思うのなら、必ず実行してください。

(村田)

## 「スマホ世代」の誕生

●いやいや、スマホは実に便利である。我が家もその恩恵にあずかっている。先日、カミさん

と山に登ったが、地図も見られるし、現在地もわかる(実は、「紙」の地図を置き忘れるという大失敗をしたのだった)。鹿児島にいた高齡の母は、弟家族と同居しているが、スマホでその様子がわかる。孫は、一才半になるが、娘のフェイスブックで、その様子は常にチェックできる。何となく時代になった。



●さて、創学舎に通う高校生もスマホの恩恵を十分にうけているようだ。「スマホ命」という生徒がいる。少しでも時間があればスマホ。授業中も教科によってはスマホという生徒も。私が最初に受けもつ時に、全員調査をするのだが、平均して二〜三時間というところ。中には、六時間という人もいる。学校の中には、八時間ぐらいやっている人もいろいろらしい。

●数年前は、「ウチの子はゲームばかりして困ります」と相談を受けることがあったが、その場合男子生徒である場合がほとんどで、一日中やっているといたのは、稀であったし、女子はほとんどいなかった。今は違う。男子も女子も高年生のほとんどがスマホ漬けという状態ではないか。

●ある新入塾生は、中三の時に受けるV模擬で偏差値五十五ぐらい。スマホを五時間やっていると、GMARCH(V模擬に換算すると七〇近い)に行きたいという。別の新入塾生は、学費を捻出するために、アルバイトをしていて(そのことは立派だが)、スマホを四時間として、難関校を狙うという。また、運動部に入っていて、朝練もやり、午後七時近くまで練習をし、スマホを毎日二時間という生徒もいる。

●どこがおかしい。今述べた三人について言えば完全に終わっている。こんな生活をしていてどうなるか、想像する力もなく、何とかなると思ってる。そのキミ!キミもそうではないか?あなたのお子さんは大丈夫ですか? ●塾や予備校に通うからすべて上手くいくのではない。過大な期待をしてはいけない。塾や予備校で学んだことをきつかけにして、自分だけにやるか大事なことである。もともと、先の三人のような状態になった自分の子を自分の力で修正できる親は少ないだろう。先日、子供二人を中高一貫の私立に入れた親の相談を受けた。スマホを止めようとすると大ゲンカ。両親ともに困り果てているとのことだった。

●因みに、子供の現状をつかんでいない親が半分以上であるという事実も重要である。スマホは自分の部屋でできる。親が夜食を差し入れにきたらすぐ隠せる。「勉強やってみよ。」と言えば、親は喜ぶ。ちよるいもんだ。そして、布団の中で二時、三時までやっている生徒も現実にいる。スマホ中毒は、想像以上に進行しているのだ。数年後、恐ろしいほどの学力低下がみられ、「スマホ世代」と呼ばれるのだろう。

●私の授業では、毎回スマホの害を述べて、時間を減らすよう促している(怒鳴っている)。実際かなり減っているはずだ。「スマホの時間と学歴は引き換え。」「スマホの時間と偏差値は引き換え。」「勉強したいなら、部活止めるかスマホ止めるか。」「それとも進学を諦めるか?」 (小林)

### ▼▲継続希望の方へ▲▼

▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送りいたします。  
▶在籍していた教室までご連絡ください。

